

平成22年度自治体国際協力促進事業（モデル事業）

# 国際交流・国際協力に基づく ESD教材・カリキュラム 開発事業



松山市（愛媛県）

## 1 立案経緯

ESDは、日本が国連に提唱し、2005年から始まった10年キャンペーンです。しかし、その日本においても、地方での浸透は非常に緩やかなものであり、ESDという言葉自体を知っている人は多くありません。

ESDを浸透させていくためには、継続的な取組が必要となる中、松山市が取り組むESD事業のパートナーであるNPO法人えひめグローバルネットワークでは、2000年から、内戦からの復興を目指すアフリカ・モザンビークの平和支援事業を実施していました。また、その経験を生かして、小学校から大学まで幅広く教育に携わり、「地域発ESD」として、全国にも紹介されていました。その活動がモザンビークにおいても高く評価され、2008年5月には、アフリカ開発会議で横浜に来られていたゲブーザ・モザンビーク大統領をはじめとする政府首脳が松山市を訪れました。

その際、一行は愛媛大学も訪問され、アリ・首相（当時文部教育大臣）による講演が行われました。これをきっかけに愛媛大学とモザンビークのルリオ大学との間で、学術交流協定が締結され、愛媛大学の「環境ESD指導者養成プログラム」において、教材開発も行われてきました。

こうして、市民主体の官学民の協力体制が整備されてきたため、松山市では2009年度から財団法人自治体国際化協会の助成を受けてESDに取り組むこととしました。松山市、松山国際交流協会、NPO法人えひめグローバルネットワーク、小学校・中学校・高校・大学の各教育機関で、「松山ESD促進実行委員会」を組織し、モザンビークを題材に、官学民が協力して「途上国の現状を理解し、持続可能な社会づくりに資する教材・カリキュラムの開発」を2ヵ年で行うこととしました。そして、小学校から大学までの各教育課程で交流・実体験をもとに、環境問題や貧富の格差など、地球規模の問題を頭で理解するだけでなく、協力や貢献といったかたちで「実際に行動できる人間へ」と育成することを目的とし、さまざまな授業モデルの展開に取り組みました。

## 2 事業内容

### (1) 松山市ESDの具体的な取組

まず、2009年度に、行政の職員や教育関係者、NPOなど、ESDの実践者による勉強会を立ち上げ、連携するしくみを構築し、ESDに関する意見交換や情報の共有を行いました。そして、関係者だけの話し合いだけでなく、モザンビークの研究者や専門家を講師として招き、市民や学生も参加できるセミナーを開催しました。また、松山市以外の地域からも実践者を招いて会議を開催するなど、汎用性のある実践モデルとして、他の地域へも発信できるようにしました。

最も重要な取組は、「学校での実践」という展開です。その中心となったのが、松山市立新玉小学校です。現在、小・中学校では、主に「総合的な学習の時間」において、国際理解や情報・環境・福祉・文化など、独自のテーマを持って授業に取り組んでいます。新玉小学校では、ちょうど国際理解をテーマとした学習実施をしていたため、2009年度

は6年生2クラス、約70名に対し、年間を通じて約70時間、2010年度は6年生3クラス、約90名に対し、年間を通じて約75時間の授業を行いました。また、2010年度の新たなモデルとして、小野中学校2年生20名に対し、35時間の授業を行いました。

## (2) 新玉小学校ESDからユネスコスクールへ

新玉小学校では、子どもたちがより主体的に取り組めるよう、身近な問題から、世界の問題へとつなげていくように工夫しました。その身近な問題が、「自転車」が巻き起こす問題です。松山市は、気候が温暖で雨が少なく、平らな土地が続いているため、自転車の利用が非常に多い地域です。新玉小学校の校区内には、松山市最大のJR松山駅や市電・バスターミナルとなっている松山駅があり、駅利用者が周辺の道路上に自転車を無造作に置くことで、歩行者にとって大きな障害物となっています。また、その自転車の中には、乗り捨てられるものも多く、自転車そのものがゴミ化するなど、松山市にとって長い間、なかなか解決できない大きな問題となっています。

新玉小学校の子どもたちは、校区内にあるこうした問題を身近に感じていましたが、NPO法人えひめグローバルネットワークが、ここで放置され引き取り手がなくなった自転車をモザンビークへ送って役立てている活動とはつながっていませんでした。このモデル事業を通じて、子どもたちは、自転車が起こす身近な問題について学び、自転車がモザンビークでは生活に非常に役立っていること、モザンビークという途上国の現状について学びを深めていきました。そして、自分たちにできる活動として、放置自転車をきれいに磨いて再利用可能な状態にし、メッセージとともにモザンビークへ「贈る」という「行動」へとつなげられました。単に支援物資を「送る」のではなく、「贈る」プロセスに気づきや学びがあることが特徴となっています。また、モザンビークからの留学生が授業に参加したり、モザンビークをはじめ他のアフリカの人々と一緒に海へキャンプに行くなど、実際に交流する場を設けて、アフリカの現状を生々の声で聞いて、より身近に感じてもらえるよう工夫しました。こうした学びを通じて、子どもたちが自発的に募金活動をし始める、といった積極的な行動も見られるようになりました。

そして新玉小学校では、こうした取組内容をパリのユネスコ本部へ申請し、2011年3月、小学校では四国初の「ユネスコスクール」認定校となりました。

### 【活動内容】

#### ① 1学期の活動

まず、修学旅行で広島へ行くことをきっかけとして、戦争や原爆などについて学びました。また、世界には現在も戦争や飢餓などに苦しんでいる国があることも知りました。次に、戦争や飢餓などに苦しんでいる国について、本やパソコンで調べ学習を行い、世界には平和とはかけ離れた生活を強いられている国が、たくさんあることを知りました。さらに、子どもたちを世界の貧困レベルにグループ分けして、第一、第二、第三世界の住人となり、生活の不平等さを実際に体験し、自分に何ができるかを考える体験プログ

ラム「ハンガーバンケット」を行いました。



## ② 2学期の活動

2007年から新玉小学校と交流のあるモザンビークのために、自分たちにできることを考えました。そして、「自転車を贈る」、「募金をする・物資（文房具）集めをする」、「メッセージを送る」という3つのグループに分かれて活動をしました。「自転車を贈る」グループでは、自転車の手入れの仕方を調べ、実際に試して、3学期の活動へつなげました。「募金をする・物資（文房具）集めをする」グループでは、全校児童や地域の方々に募金や文房具の寄付を呼びかけました。その結果、募金は総額13,000円集まりました。また、モザンビークの小学校で不足しているものさしやはさみ等、たくさんの物資も集まりました。「メッセージを送る」グループでは、新玉小学校での学習や給食の様子を写真付きのメッセージカードにしたり、校歌や「平和の鐘」を合唱してビデオレターにしたりしました。



## ③ 3学期の活動

～世界の現状について知り、自分たちにできることを考え実践していく～の総仕上げができるように、自転車を贈る活動を続けて行いました。1台の自転車を3人で担当し、手入れ前はどのような状態の自転車なのかチェックカードに点検していきました。磨き方を教え合いながら、2時間みんなで手入れをしました。部品を代えなくてはいけないところや、直してほしいところを見つけ、サイクルショップの方に依頼して、部品の交換をしていただきました。また、小学校の壁に使ってもらうようコンパネに絵を描いたり、自転車につけるメッセージカード、教室用のカレンダーを並行して作ったりしました。



#### ④ 考察

世界の平和について、子どもたちに興味をもたせることは簡単ですが、実感を伴った平和に関する理解や、心の底から「何かできることをしたい」と思う心を育むのは、なかなか難しいことです。しかし、今回の活動のように、市やNPO法人、外国（モザンビーク）にかかわりのある方の協力のもと、リアルタイムでの情報を得たり、体験的な活動をふやしたりすることで、子どもたちのモザンビークに対する思いが深くなりました。特に今回は、集めた学用品を直接届ける機会に恵まれました。現地の人々の喜ぶ顔がビデオで流れた時の子どもたちの表情はとてもよいものでした。自分たちも人の役に立つことができたという、有能感を味わうことができたと考えられます。今後もこのような学習を続けていくためには、関係者との連携をより密接にもち、計画的に実施していく必要があると考えています。

#### ⑤ 四国の小中学校で初のユネスコスクールに

ユネスコスクールとは、ユネスコ（UNESCO：国際連合教育科学文化機関）憲章に示されたユネスコの理念に基づき、平和で持続可能な地球社会実現のための実践に取り組む学校です。新玉小学校は、四国の小中学校としては初めてユネスコスクールとして認定されました。

### （3）小野中学校E S D

小野中学校では、2009年度、貿易が世界の人々の暮らしにどのような影響を与えるか疑似体験を通じて理解させる参加型のワークショップ「貿易ゲーム」が教員の手で行われ、ゲームを通じて、生徒たちは世界の貧富の格差について気づき、問題意識が芽生えました。2010年度は、それが具体的な行動につながるよう、職業課の授業の中で20名を対象に、年間35時間をかけて「小野中E S D」として取り組みました。

#### 【活動内容】

はじめに世界でいま何が起きているか、そこで暮らす人々はどのような環境に置かれているかを学びました。そして、自分たちに何ができるか、どんなことをすると役に立つかを考えていきました。愛媛県国際交流センターやえひめグローバルネットワークを訪問し、モザンビークから帰国したばかりのスタッフから新鮮な情報を聞いたりして、より詳しく知り、個人個人が考えを深めていきました。参加している生徒は、外国に興味があったり、途上国の人を助けたいと思う人が多く集まっていますが、世界の状況は

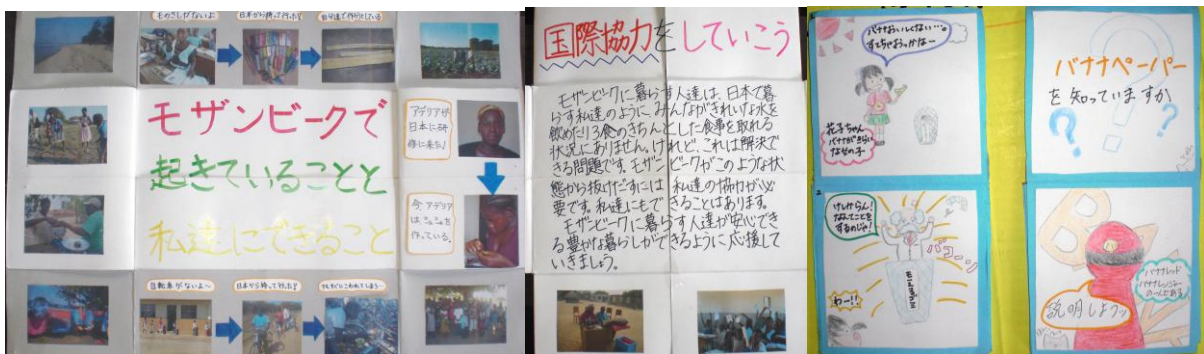
あまり知らないのが現状でした。しかし今では「自分たちにできることがあればやってみたい」という人がほとんどです。自分たちにできることを一生懸命に考えることで、徐々に積極的に発表したり表現できるようになった生徒も増えました。この授業で最も重点的に話し合ったテーマが「フェアトレード」でした。発展途上国でつくられた作物や製品を適切な値段で取引することによって、生産者の生活を豊かにすることを支える仕組みです。授業でも多くの製品を見て、実際にはコストに見合った適正な価格で取引できていないため、途上国の人々が十分な収益を得られていないことを学びました。売る人も買う人も互いに納得できる取引が成立するには、たくさんの人に仕組みを知ってもらうことが大切と考え、フェアトレードをどうやって知ってもらうかを話し合いました。

月	日	学習テーマ	学習内容	生徒の反応
5	6	「？を！」に変えよう。	県内の国際事情や地球を取り巻く諸問題について考える。	愛媛県の外国人の人数など県内の国際事情や、地球温暖化など世界規模の問題について学んだ。
	13	途上国と先進国の生活を知ろう。	ハンガーバンクットを通して、生活の違いを体験する	どんな思いで生活しているか、少しでも相手の気持ちを考えることが大切であることを学んだ。
	20	モザンビークの様子を知ろう。えひめグローバルネットワークの活動を知らう。	モザンビークやえひめグローバルネットワークの活動について学ぶ。	どんなものでも大切にするモザンビークの人々の生活を知り、自らの生活も改める必要性を感じていた。
	27	愛媛県国際交流センターとえひめグローバルネットワークに行ってみよう。	愛媛県国際交流センターとえひめグローバルネットワークの見学と講義	訪問したことでより具体的に活動内容を知ることができた。
6	3	わたしたちにできることは何なのか考えよう。	今後の活動に関するグループディスカッションを行う。	互いに意見を出し合うことで、他者のアイデアから学ぶことができていた。
7	1	アメリカの先生と一緒にフェアトレード商品をつくる計画を立てよう。	フェアトレード商品をつくるに当たり、さまざまなアイデアを出し合う。	自分なりに英語でコミュニケーションを図り、アメリカの先生とアイデアを共有することができた。
	15	フェアトレードについて考えよう。	フェアトレードの伝え方について考える。	フェアトレードとは「お互いが納得できる平等な取引」といった考えを自ら考えだしていた。
9	16	文化祭の発表計画と準備をしよう。モザンビークの近況について知ろう。	各班に分かれ、文化祭の発表方法について話し合いと準備を行った。モザンビークで起こった暴動の真相について話を聞いた。	動画で現地の状況を見て、自ら情報を得ようとする意識が重要であることを理解した。
	30	文化祭の発表の準備をしよう。	各班でテーマを設定し、これまでの学びを伝える方法を考える。	展示物をつくるために、班ごとに協力して準備を行った。
10	6	文化祭の発表の準備をしよう。	各班でテーマを設定し、文化祭の発表準備を行う。	展示物をつくるために、班ごとに協力して準備を行った。
	21	文化祭の発表の準備をしよう。	各班でテーマを設定し、文化祭の発表準備を行う。	展示物をつくるために、班ごとに協力して準備を行った。
	28	これまでの学習を振り返ろう。	国際理解コースで学んだことについて復習し、今後どう生かすか考える。	これまでの学びで培ったものを実生活で役立てる必要があることを感じていた。



授業では、えひめグローバルネットワークのスタッフをはじめ、大学生、新聞記者、アメリカの先生など多くの方々の話を聞き、議論する機会に恵まれました。これは生徒にとって普段の授業とは違う特別な授業であったように思います。授業はフェアトレードに主眼を置いて進められました。フェアとはなにか、正等とはなにか、ということをも

話し合いました。この議論の積み重ねこそが、最も生徒を成長させたと思います。その議論から生まれた数々のアイデアをもとに、文化祭の発表に向けて絵本やクイズなどの作品や展示物をつくり、フェアトレードをわかりやすく伝えることができました。このような学習は、地球規模の問題を、自分サイズに置き換え、できることを実践していくというプロセスがあります。それを体現できたことで、生徒も自信を深めることができましたと思います。彼らが高校に行っても、大学に行っても、働くようになって自分に関われる方法を自ら導き出す考え方を学べたことが最大の成果だと思います。しかし、このような中・長期的な学習は全ての学校で取り組んでいるわけではありません。このような学びの提供を推進していく上でも、まずは仕組みから整備していく必要性を強く感じています。



#### 4 まとめ

このように、今回のESDをテーマとしたモデル事業は、学校・教員の主体的な取組とともに、地域の中で多様な個人・組織に支えられ、顔が見えてつながるという実感を伴う展開で育まれてきました。一方、このESDの取組を、今後学校教育の中で普及させていくには、授業時間や実践者が限られていることから、さらなる工夫が必要になります。そこで、2011年度からは、モデル事業の成果である「教材・カリキュラム」の活用とあわせて、松山国際交流協会の事業として「ESDコーディネーター派遣制度」を導入することとしています。現状では、普及に向けた課題も多くありますが、今後も官学民が連携する体制を生かしながら、課題解決・改善に向けて「ひとりの100歩」より「100人の一歩」の歩みへとつないで学びあうESDの普及に努めたいと考えています。